

入来の麓



「このところ世界的に異常気象で、日本列島も梅雨入り前なのに大雨が続いているが、私たち「入来花水木会」のイベント「渋谷氏下向750年記念北薩歴史探訪の会」当日の五月十日は前日から雨が上がっていた。

今年が関東からはるばる薩摩の川内川流域に渋谷五兄弟が地頭として下向して、満750年に当たるということを知ったのは、昨年春であった。渋谷五兄弟は、それぞれ領地の名を取り東郷、祁答院、鶴田、入来院、高城を名乗った。750年という滅多にない機会に、入来院氏ばかりでなく、四百年前に散り散りになった四氏の末裔の方々と、往時を偲

ぶ会を持つことが出来れば、町起こし的一端にもなる筈である。この企画を実現するために、身近な女性四名で「入来花水木会」を結成したのは一年前のことだった。

先ず中世の面影を残す入来の麓の散策をした後、城郭研究の第一人者である鹿児島短期大学学長三木靖先生に渋谷氏に関する講演をして頂く。昼食後は残りの四氏の足跡をたどり、風光明媚ないむた池で懇親会を開こうというものである。

入来院氏は人吉の相良氏とともに、鎌倉時代からの領地を維持し続けた数少ない氏族である。戦国時代に島津氏の軍門に下ったが、島津義久、義弘の母が入来院重聡の娘であったことから、所領は入来一か所に縮小されたものの、明治維新まで存続するのである。

共に下向して来たほかの四氏は、前後して島津氏に領有され一時は没落したが、血脈は嘗々と続き、現在各界で活躍されている。

呼びかけは先ず歴史関係の諸雑誌の掲示板欄 新

聞の催事の欄などに掲載してもらつたことから始まつた。テレビでもお知らせを流してくれた。締切り一週間前、南日本新聞のコラムに取り上げられたことも、追い風となつて、申込みの電話が鳴り続けた。

花木会会員の筆頭のKさんは地元根ざした細やかな心配りで、年来のお友達とともに影の下支えをして下さつた。若いEさんは抜群のパワーで、北薩を駆けめぐり、下調べや買い出しなどこれ又裏方を担当して、大会でも司会を担当。その落ち着いた対応ぶりは皆を感じさせたのだつた。

こつした一騎当千のメンバーの活動によつて、集まつたのは結局総勢百七十名。関東、京都、九州全土からの申込みである。当日は全員が大型バス三台と町のマイクロバス一台に分乗して、青葉溢れる川内川沿いの山々を縫つての紀行となつた。午前中の三木先生の講演にも、百名を越える地元の聴講者が加わつて、昨秋落成の文化ホールは大賑わいとなつた。そして何よりも、次々と話しかけて下さる参加者の喜びの聲が、会員の百日余りの準備の疲れを吹

き飛ばしてくれたのだつた。

懇親会場のいこいの村「いむた池」の大広間は満席で、実に盛況であつた。私たちの精一杯の努力を十分理解して下さい。その後毎日のように感謝のお便りを頂いている。 入来町の参加者は、

「入来町にこつした会場があればなあ」

と言つ。初めて訪れた方の中には

「温泉の町入来というから、入来温泉に一度入つてみたかった」

と言つ人もいる。

しかし、遠来のお客様に満足してもらつたには、現状の入来町の施設はあまりにもお粗末である。本当に町を豊かにしようと思つたならば、後追いの開発よりもこつした方々の声に耳を傾けるべきだと思つ。

ご存じない方に説明すると、入来町は鹿児島から出水に抜ける国道328線と、川内市から瀧辺空港へ通つている空港道路の交差点上にある交通の要所である。八重山の豊かな水系によつてお米も美味しい。温泉は鉱泉で鉄分を多く含有していて薬効のあ

ることはつとに有名である。そして何よりも古い歴史を物語る史跡が多数保存されているのである。

特にわが家の茅葺き門のある麓地区は、玉石垣を巡らせた武家屋敷の一群が塊のまま残されていて、優しい風情の清敷城と一体になって、貴重な街並みを形成している。

かつて入来を世界の入来たらしめた、故朝河貫一博士の「入来文書」によって、歴史を学ぶものメツカともなっていることを、地元の人達は案外認識していない。

私も四年前までは東京に在住していた。夫の郷里のこの地に移り住んで、遺跡や自然の豊富さに驚いた。都会人の欲するものが何を十分知っている私は、その保存の大切さを声を大にして語り続けている。

今年は寅年。私の故郷信州諏訪で六年毎に開かれる御柱祭の年である。法事もあって、里曳祭のコールデンウィークに夫と帰郷した祭見物希望の棟梁のKちゃんを伴って。

一日間歩き回り、華やかな御柱祭りの意気や豪気を堪能した。翌日霧ヶ峰から白樺湖に抜けるピナスラインを案内した。車山の展望所に立てば左から蓼科山、八ヶ岳連峰。その裾野の上に富士山がうつすらと顔を出している。雪肌に残る甲斐駒ヶ岳など南アルプス連峰が正面に、その右端に御嶽山の白い冠が見えて、北アルプスの秀峰と連なる。

「全て規模が違いますね」

夕食後棟梁が呟いた。

「でもね、ここには麓はないの。入来の麓は真似の出来ない遺産なのよ」

棟梁は心から納得して深く頷いた。